

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

待望の雪に恵まれた大北地域だが、生活困窮者には厳しい状況だ。一気に積もった雪の片づけ、屋根に重く積もった雪の処理、暖

房費も節約できないほどの寒さ、買い物や病院などの外出も制限され、冬の厳しさを実感する世代が多くなってきた。「私には、雪は厄介なもの。雪ごいななどしないでくれ」との笑えない会話が聞こえてくる。

1月中旬、大町市内で開催された会議に出席するために、往復JR大系線を利用する。今回も外国人利用者の多さを実感する。複雑な利用内容も慣れたもので飯森駅から白馬駅まで利用した若いカップルは、会話から駅前周辺の居酒屋が目的と分かる。自由気ままに

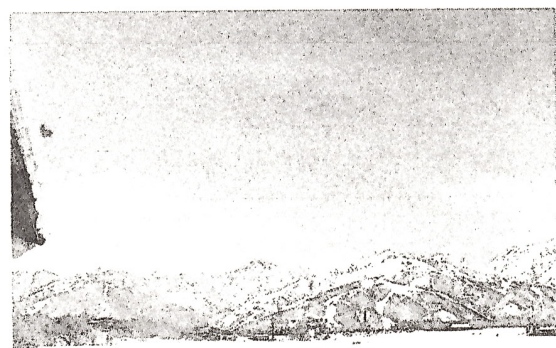
行動する姿に、改めて日本の治安の良さを再認識する。会議の参加者は、同世代メンバー。昭和40年代・50年代に大町市内を楽しんだ年代だ。少しでも都会の雰囲気を感じたいとワイ

を温めてくれる。だが、大町市内の寂しさを感じる事も事実だ。今年6月に大町市で、「北アルプス国際芸術祭が開催される。賛否両論が聞こえてくるが、大切な事は、イベントを実行する事で認識していないので

## 地域で展開される活性施策に責任を明確にする大切さについて考えてみませんか

スキーが楽しめるバーができて、何回か出掛けたものだ。会議終了後は、いつも「折弁」から「なじみの酒店」。「居酒屋」そしてカラオケとお決まりのコース。活気のあった大町を思い出し、より親交

だと考える寛容さが、次の世代に希望を与えたい。地域で行われるイベントで「主催」「協賛」「協力」「後援」が使われるが、多くの人は明確な違いについて認識していないので、事故の発生時などには、その責任が問われる立場だ。事故など無いと断言してはいけない。賠償事案に対応できる団体で無い事は明らかだ。実施する事が、意義があっても、主催する者が誰なのか関係者が的確に判断できる地域となるとほしいと願っている。



(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)